歌語「花の雪」とその周辺

藤原麻弥子

一　制詞「花の雪ちる」

『新古今集』に俊成の代表歌のひとつとして名高い次の歌がある。

摂政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに

またやみむかたののみのの桜がり花の雪ちる春のあけぼの

（新古今集・春下・一一四）

『拾遺愚草』によって知られるように、建久六年（一一九五）藤原良経が八人の女房歌人に詠ませた百首歌の披講の際に催した五首歌会で詠出されたものであるが、のちに『俊成卿百番自歌合』『近代秀歌』遺送本の秀歌例、『秀歌体大略』『定家八代抄』にも入れられ、また『井蛙抄』にも「この人々の思いれてすぐれたる歌」とされている。なかでもとりわけ、為家の『詠歌一躰』甲本の「歌のすがたの事」に「近代よき歌と申しあひたる歌」として引かれ、第四句「花の雪ちる」は、甲乙丙三本で「ぬしある詞」の中に入れられ、その使用を禁じられたのは注目される点である。[1] この「花の雪ちる」について『美濃の家つと』が次のように指摘している。[2]

狩は、雪ちる比する物なるを、その狩をさくらがりにいひなし、其雪を花の雪にいひなせる、いとおもしろし

久保田淳氏はこれに首肯されて『『桜狩り』の縁語として『花の雪』という表現が得られた」との見解を示しておられるが、[3] 夙にこの句を含む『詠歌一躰』の「ぬしある詞」について言語学的観点から論じられた丸山嘉明氏は「花と雪との中間センス」と述べておられる。[4] また、この一首について詳細に論じておられる渡部泰明氏は次のように指摘される。[5]

花と雪とを無媒介に掛け合わせるこの圧縮された一句を獲得したことによって、花とも雪ともつかぬものの散り交う空間的な

広がりを形象化し得た。

すなわち『伊勢物語』を本説として「交野の御野」を配したことによって、落花の風景に「雪」の中の「狩」の風景が重ねられるのである。石田吉貞氏は「雪」が「狩」の縁であることについて「修辞上の技巧にとどまる」と述べておられる[6]のだが、確かにこれはレトリックに違いないけれども、この歌においてはレトリック自体が「交野の御野」の豊穣な物語世界の支配下にあるといっても過言ではあるまい。「雪」は縁語によって連想的に導かれたというよりも、むしろ世界を構築する不可欠な要素なのである。「雪に見立てた花」という単なる見立て表現[7]にとどまらぬ「花の雪」の幻想的な風景――「花」と「雪」のイメージの渾淆あるいは重複――は、この歌において一回的に現出するのである。この点において他の歌における「花の雪」とは明確に異なるものであるといえよう。例えば、慈円、良経らによる次のような歌がある。

関路花

駒なべてたがひに跡ををしむかな花の雪ちる白河の関

（仙洞五十首歌合・八一・大僧正＝慈円）

花

やまかげやはなのゆきちるあけぼののこのまの月にたれをたづねむ

（秋篠月清集・四一三）

俊成歌では設定された本説の物語世界によって「花」と拮抗するほどの強度が「雪」に付与されているのに較べて、慈円、良経歌では「花」が散る情景に「雪」はただ「花」の見立てとして引き合いに出されるだけである。『詠歌一躰』が俊成の句を「ぬしある詞」と規定したことの一因をこの点に帰することは、前に挙げた先学諸氏の見解にも一致するところである。「花の雪」は俊成歌以後、新古今歌人に好んで用いられるが、制詞とされてからはほとんど使われなくなる。本稿では『詠歌一躰』の「ぬしある詞」のひとつである俊成の「花の雪ちる」という表現を軸として、それに関連する「花の雪」及び「花の白雪」という歌語の生成と展開について通時的に検討することによって、その位相を明らかにしたいと思う。

二　「花の雪」と「花の白雪」

花を雪に見立てるのははやく『万葉集』に見られるが、これが六朝詩の影響によるものであることは既に指摘されるところである。[8]

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

（万葉集・巻五・八二六・旅人）

これは梅の花が散る様子を雪に見立てたものであるが、このように梅花を雪に見立てたもの、あるいはその逆の見立ては『万葉集』の後の三代集にも数多く見られる。『古今集』以後は桜花の歌が増

加するのに伴って桜の雪への見立てが多くみられるようになるが、ここに認識のあり方において大きな違いが生じてくる。すなわち「梅」と「雪」は早春という季節に両立しうるから実際に見紛うこともあるが、春の「桜」が「雪」と区別がつかないという状況は現実にはあり得ない。この、決して起こりえない「桜」と「雪」の両立が和歌史に継承されてゆくのである。

片桐洋一氏は『古今集』の見立て歌について、それらが漢詩の影響を受けて「…とぞ見る」とか「…とこそ見れ」「とぞあやまつ」の形を多くとり「晴の文芸としての役割を和歌が分担しようとした宇多朝歌壇において爆発的に流行した」ものだと論じておられる。[9] 片桐氏はさらに「詠歌対象を、それとは全く異質な物に直感的に見立てる『見立て』本来のおもしろさ」から「既に見立て終えた結果を前提にして表現する方法」へ、すなわち「見立て」から「歌語」への移行の結果として次のような歌を挙げて「浪」を「花」として見る、或いは「山」の紅葉を「錦」として見る、すなわち「Bに見立てたA」を「AのB」という形で表現するものを挙げておられる。

草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける
（古今集秋下・二五〇・康秀）

霜のたてつゆのぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる
（古今集秋下・二九一・関雄）

「雪に見立てた花」を意味する「花の雪」もまた、これらと同様の過程をたどって発生したことが推測されるのだが、勅撰集における「花の雪」の用例は次の表に示すように（表一）俊成の「またやみむ……」の歌が最も早い。[10]

（表一）

新古今集1	続古今集1	続拾遺集1	玉葉集1	風雅集2	新千載集2

勅撰集以外では「花の雪」の最も早い使用例として「波の花」「山の錦」と同じ宇多朝時代の延喜二一（九二一）年の『京極御息所歌合』で詠出された作者不詳の歌がある。

このまよりはなのゆきのみちりくるはみかさのやまのもるにざるべき
（京極御息所歌合・五・）

また『古今和歌六帖』にも「宅・となり」の題で次の歌がみられる。

ちかければあはむとおもふに春なれど花の雪にぞふりへだつめる
（古今和歌六帖・第二・一三三八）

これは、逢いに行けない口実として「雪」（本当は「花」）が降り積もって障害となっているからだと強弁するもので「花」を「雪」とみなすことによって「ふりへだつ」ものとしての「雪」の特質を「花」に利用しているのである。つまり美的対象の客観的描写において「花」と「雪」とが類似性を共有しているというよりもむしろ

『古今集』に入集する『伊勢物語』十七段の次の歌、

けふこずはあすは雪とぞふりなましきえずはありとも花と見ましや　（古今集・春上六二）

が落花を「雪」とみなし、「消え」ないからやはり「花」だと言って意味を転じてゆくのと同様、両者の類似性を巧みに生かす機知の表出こそに眼目があるといえる歌である。

「花の雪」という表現が、俊成歌においてそうであるように桜花の美の客観的に描写に使用されるのは、西行の家集に「花十首」として見られる次の例が最も早い。

花のゆきのにはにつもるにあとつけしかどなきやどといひちらされて　（山家集・一四五九）

ながめつるあしたの雨の庭のおもに花のゆきしく春の夕ぐれ　（山家集・一四六〇）

この二首は西行の出家前の作とする説、幼稚であるとするとの説があるが『山家集』の中に完全な形でみられる百首歌の歌群に含まれるものである。[11] 西行歌における桜花の見立ての方法は『俊頼髄脳』に、

また、歌には似物といふ事あり。さくらを白雲によせ、散る花をば雪にたぐへ……[12]

とある通り、咲き誇る花は「雲」に、落花は「雪」に見立てられることが指摘されている[13]が、ここでは「花の雪」が初めて見られることに加えて、それが落花の後に地面に一面に敷いたものを指している点が注目されるのである。

この西行歌の後に詠まれた俊成の「またやみむ～」のほかにも良経、雅経、通具といった歌人の詠歌の中に「花の雪」という表現は多く見られることから新古今時代に好んで使用されたことがわかる。次にその用例を一首ずつ挙げる。

古渓花

しもとゆふかづらきやまのたにかぜにはなのゆきさへまなくちるなり　（秋篠月清集・九六二）

家会に、月前花を

はなのゆきそらにしられぬいろながらこのしたかぜに月ぞさえ行く　（明日香井集・一三一九）

ふきはらふこのしたかぜにかつきえてつもらぬにはの花のゆきかな　（千五百番歌合・五二七・続古今集一四四　通具）

このように「花の雪」という表現の端緒は宇多朝時代に見られるものの勅撰集には用例が見られず、勅撰集以外での例は西行に至るまでには先に挙げた二首だけである。そして「花の雪」は新古今時代に流行するが、表一に示すように『詠歌一躰』で「花の雪ちる」が制詞となったのちに激減し、一八番目の新千載集以後には全く見

られなくなる。勅撰集以外でも、「花の雪」は私家集では『続草庵集』に一例、『伏見院御集』に一例、『経氏集』に一例、『草根集』に二例、私撰集では『新和歌集』に一例がみられるだけである。[14] このように「花の雪」の使用が激減するいっぽう「花の白雪」は一九番目の新拾遺集以後の用例が増加している点が注目される。これは「花の雪」のような禁制から免れたこと、また制禁のために「花の雪」の使用が控えられていったことに伴ってその代替機能をも果たしたのだと推測されるのである。「花の白雪」の勅撰集における使用例は次の通りである。[15]

（表二）

千載集1	新古今集1	続後撰集2	続古今集1	続拾遺集2	
新後撰集2	玉葉集2	続千載集3	続後拾集2	風雅集2	
新拾遺集5	新後拾遺集4	新続古今集4			

「花の白雪」の最も早い使用例は、永暦元（一一六〇）年成範によって催された法勝寺十首で詠出され、千載集に入集した俊恵の次の歌である。[16]

みよしのの山した風やはらふらむこずゑにかへる花のしら雪

（千載集・春下・九三）

岩波新大系『千載和歌集』の脚注によれば、雪のような花が梢に咲き返る様子を眺望して吉野の山の麓を吹く風が落花を吹き上げている、という内容の歌で、これは『古今集』の貫之の歌、

白雪のふりしく時はみよしのの山した風に花ぞちりける

（古今集・賀・三六三・貫之）

を本歌とし、本歌の趣向を逆にして詠まれたものである。吉野は雪の名所として名高い地であることから、次の歌のように吉野の「雪」と「桜」は、見紛うものとして常套的に詠まれるのである。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

三吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける

（古今集・春上・六〇友則）

俊恵の歌もまた「吉野」という設定によって桜花とともに雪のイメージが彷彿とされるものだが、この俊恵の歌の趣向と類似した歌が俊恵の主催した歌林苑の歌人、藤原広言の家集に見られる。次に挙げるのは治承二年（一一七八）日吉社歌合で出詠されたものである。

日吉歌合、花を

あさまだきはるの木ずゑをみわたせばかすみにきゆるはなのしらゆき

（広言集・一七）

これらはいずれも「木ずゑ」近くの縹渺とした遠景描写である。

また、その従兄にあたる定家の編によると考えられている藤原長方の家集に「花の白雪」の使用例が見られるが、これも遠景描写で

あり、桜花が風に吹かれて空に消えて行く情景である。

花を

春風のやや吹くままに高砂の尾上にきゆるはなのしらゆき

（長方集・二八）

「花の白雪」もまた「花の雪」と同様、新古今歌人に広く受けいられたことは、その家集中に良経は三例、慈円は四例、家隆に一例、定家に三例見られることからも明らかであろう。次にその用例を一首ずつ掲げる。慈円の歌は文治二（一一八六）年西行の勧進した二見浦百首、家降の歌は寛喜元年（一二二九）の為家家百首それぞれ詠出された歌である。

吉野山はるの梢をながむれば風にぞきゆる花のしら雪

（拾玉集・五一四）

かづらきやたかまのあらし吹きぬらし天にしらるる花の白雪

（千二集・一二五八）

ふりにける庭の苔路に春暮れて行へもしらぬ花のしら雪

（拾遺愚草・二一四）

さそはれぬ人のためとやのこりけむあすよりさきのはなのしらゆき

（新古今集・春下・一三六、秋篠月清集・一〇一八）

ところで、この「花の白雪」の最も早い使用例である長方の歌は、のちに末句の「花の白雪」が「花の白雲」として『新勅撰集』に入集している。[17]

はるかぜのややふくままにたかさごのをのへにきゆる花のしらくも

（新勅撰集・春下・一〇〇長方）

「白雲に見立てた花」を意味する「花の白雲」も注目すべき歌語であるが、この表現もまた最も早い使用例が広言の詠歌の中に認められるのである。

よしのやまかすみはれのくたえまよりたちかはりぬる花のしらくも

（広言集・一六）

このように「花の白雲」も「花の白雪」と同様、俊恵とその周辺の歌人によって初めて用いられるようになった表現だということができるのである。「花の白雲」の使用例は『新勅撰集』の長方歌より先の八代集には見られないが、次の「花の雲ま」の例も新古今時代に至って現れたものである。

みねしらむこずゑのそらにかげおちて花の雲まにありあけの月

（千五百番歌合・三一六・忠良　風雅・春二・二〇七）

「花の雪」「花の白雪」という表現は―また「花の雲」「花の白雲」も同様に―「浪の花」「山の錦」などと同時期に見立て表現を圧縮することによって発生して継承されたというよりも、むしろ新古今前夜に西行、俊恵らが桜花の美の描写に際して用い始めることによって定着した、きわめて新古今的な表現であるといえるのでは

ないだろうか。

三　「花の雪」と「花雪」

「花の雪」「花の白雪」は今までに見たとおり、①落花、②落花後に積もったもの、あるいは③咲いている花の描写であり、発話者の視界も近景のものと遠景のものとがあるというということが確認されたが「花の雪」という語は『日本国語大辞典』によれば次のように定義される。

「はなの雪」

一　白く咲いている花、また花の散るのを雪に見立てた表現。花吹雪。

二　香の名。

ここで注目したいのは「花吹雪」という意味である。落花とはもとより散り乱れる様であるが、「花吹雪」はその程度が甚大なものである。また「花吹雪」としての「花の雪」とは漢語の「花雪」という表現と同義である。次に『大漢和辞典』の説明を掲げる。

「花雪」

一　あられ。霰。

二　花ふぶき。

三　花ふぶきの柄。

『大漢和辞典』は、「花吹雪」の用例として白居易の「惜春贈李尹詩」に、

芳樹花團雪、衰翁鬢撲霜

と見られるのをひいているが、「花雪」という表現は他にも六朝以来の代表的な詩人の作品の中にも見出すことができる。次の用例は『佩文韻府』に見られるものである。

［梁簡文帝謝東宮賜裘啓］地捲朔風庭流花雪

［盧照隣和呉侍御被使燕然詩］戍城聊一望花雪幾参差

［鄭谷東屬春曉詩］潼江水上楊花雪剛逐孤舟繚飛

［蘇軾陳直躬畫雁詩］先鳴勤鼓吹乱蘆花雪

いうまでもなく中国文学においては日本と異なり「花」が特に桜花を示すものではないのであるが、ここに見られるように「花雪」が表す世界は「花吹雪」に他ならず、発話者自身を取り巻くような近景描写であるということができよう。

さて、ここで漢語「花雪」の意味である「花吹雪」をそのまま読み下した「花の吹雪」という表現が、「花の雪」の初出例を含む西行の『山家集』と「花の白雪」の初出例を含む俊恵の『林葉集』にやはり同じように初めて見られるということを指摘したい。

落花の歌あまたよみけるに

春風の花のふぶきにうづまれでゆきもやられぬしがのやまみち

山花の心を
みよしのは山路ふみ分け行きかり花のふぶきも人はとめけり
（山家集・一一三）
（林葉集・一六六八）

俊恵の「みよしのは……」の歌では「行き」に「雪」が掛かり、吉野の景物である「花」と「雪」とが配されているのであるが、西行の「春風の……」の歌について白田昭吾氏は次のように指摘しておられる。[18]

「花」と「雪」とが相即の形で融合し、両者のイメージが等しく複合的に捉えられ、一そう幽艶さが深まるのである。生得の歌人と謳われるにふさわしい言語感覚と言ってよいであろう。

これは俊成歌と同様、一首に配された掛詞というレトリックが有効に働くことによって一首の表現世界にイメージの重層性をもたせているものだといえる。このように「花の雪」と「花の吹雪」の発生がともにほぼ同時期であり、同じく西行、俊恵らによって初めて用いられていることから、これらが漢語「花雪」に由来し、その訓「花の雪」と意味内容「花吹雪」を和歌に取り入れたのだということが考えられるのである。また、これらと同時期に発生したとみられる本稿「二」で挙げた「花の白雲」「花の雲（間）」もまた漢語「花雲」からの影響が推測される。西行、俊恵の和歌表現における漢詩（漢語）との関連については詳細に検討がおこなわれるべきであろう。また「花の白雪」は「西行歌を念頭において詠出されたとおぼしい和歌が頻出」することが指摘されている[19]慈円の家集や同時代の正治初度・後度百首に出詠された歌の中にも見られる。

山旅
あくがれし花のふぶきに過ぎなれて雪の空にもしがの山ごえ
（拾玉集・三七四五正治後一〇七二）
こえくらす花のふぶきの春の山にまつりてなせそしがの里人
（拾玉集・二三〇七）
ちりまがふはなのふぶきにかきくれて空までにほふしがの山ごえ
（正治初度百首・三二〇・守覚法親王）
峰わたる花のふぶきにうづもれてまた冬ごもる谷のかげ草
（正治後度百首・六一三・鴨長明）

しかしながらこの「花の吹雪」は、その後は近世に若干使われているほかはほとんど用いられていない。「花吹雪」を意味する漢語「花雪」の摂取に始まった和歌世界における桜花の風景は、眼前で花びらの散り交う動的なものから展開して西行によって描かれたような落花の後に散り敷いた静的な状態や俊恵が描いたような遠景を眺望しての桜花の描写などが好んで描かれるようになったことが了解されるのである。そして桜花の多様な情景の描写は、「花の雪」

「花の吹雪」がほとんど用いられなくなるなかで、「花の白雪」によって一手に担われることになる。

四　制禁以後の「花の雪」「花の白雪」

『詠歌一躰』による制禁の後に「花の雪ちる」という表現が使用された例は一度であり、「従三位政子」＝後崇光院によるものである。

湖上落花を
さそひきて釣する蜑の袖までも花の雪ちる志賀の浦波
（菊葉集・一九九・従三位政子）

この歌は後期京極派の撰集である『菊葉集』に収められる。この歌は俊成歌のような「花」と「雪」との渾淆の情景ではないものの「蜑」の「袖」に「花の雪」が散りかかるという趣向は清新なものである。院という立場にある後崇光院によるこの一例以外に「花の雪ちる」は見られず、本稿「一」で挙げた久保田氏の御論考に指摘されているように「花の雪」がほとんど見られなくなるなかで、冷泉派による次のような作例は注目すべきものである。[20]

あしがらの山の嵐のあととめて花の雪ふむ竹のしたみち
（風雅集・春下・二二七・為相女）

消がての花の雪ふむ朝戸出に雲は昨日の春のよの夢
（新千載集・雑上・一七二四・為成）

これらの歌においては地面に敷いた落花は、それまでのようにただ静観の対象にとどまらず「踏む」という動作の対象となるのである。西行の描いた静的風景はここで動的な情景へと変貌する。いっぽう、その使用例が増加する「花の白雪」については『新古今集』以後の勅撰集に合計三一例が認められるのであるが、そのうち四例が第二句目におかれているほか、残りの二七例がすべて末句におかれているという点に固定化、類型化が挙げられる。[21] この表現は「花の白雪」とともに二条派によって格別好まれるのであるが、[22] その静的な風景には変化が認められる。すなわち落花の後にいったん地面に敷いた状態に（強い）風が吹いて再び桜花が舞う、という情景が多く描かれるようになるのである。

文永元年内裏にたてまつりける百首、庭上落花を
ちりつもるはなのしらゆきふきわけてかぜこそにはのあとはみせけれ
（続古今集・春下・一四三・良教）

百首歌たてまつりし時、落花を
山人のかへるつま木のおひかぜにつもれどかろき花の白雪
（新後拾遺集・春下三四・御製＝後円融）

木のもとにふるとみえても積もらぬは嵐やはらふ花のしら雪
（新後拾遺集・春下一三五・前関白九条）

いっぽう本稿「二」の（表二）に示したように、京極派による勅

撰集『玉葉集』『風雅集』では「花の白雪」の入集歌数は比較的少ないのであるが『風雅集』における用例は次に示すように雑部、釈教部に収められる歌であり叙景歌にとどまらず心情を投影したものであることが注目される。すなわち「花の白雪」の情景は人間の内奥世界をも表象するものとなるのである。

題知らず

ちるまでに人もとひこぬ木のもとはうらみやつもる花のしら雪

（風雅集・雑四八四・平親清女）

光台寺にすみ侍りけるに、二月一五日山本入道前太政大臣もとより桜のうち枝にずずをかけ、ありながらきえぬとしめす仏にはゆきにもまがふ花をたむけよと申して侍りける返事に

有りながらきえぬとみえてかなしきはけふの手向の花のしら雪

（風雅集・釈教〇八八・山本入道前太政大臣女）

後者は洞院公守女で伏見後宮の作者による歌であるが、仏が不滅でありながら二月一五日に死んだと衆生に示したことを引き合いに出して、「雪」と同じように「きえ」る「仏」の姿を重ね合わせて「花」→「雪」→「仏」という連想を表現しているのである。このような述懐性の強い歌はこのほかにも

ここのへのやどもむかしにへだたりぬ身はふるさとの花のしらゆき

（伏見院御集・四八一）

いまは身の春のめぐみも時過ぎてふりぬる宿の花のしら雪

（続後拾遺集・雑上・一〇〇二・関白太政大臣＝冬平）

のような例が見られ、最後の勅撰集『新続古今集』に撰入された二条派の次のような歌が見られる。それらは四季部に入集するものの非常に述懐性の強いものである。

八十まで我が身世にふる恨みさへつもりにけりな花のしら雪

（新続古今集・春下・一七三・浄弁）

いとどうき身のしろ衣うらみてもかひなくつもる花のしら雪

（新続古今集・春下・一七四・実遠）

前者の歌のように「ふる（降る）」ものとして「花」を「雪」に見立て、さらに「ふる（古る）」「身」を重ねる、あるいは後者の歌のように「つもる」ものとして「花」や「雪」に「うらみ」を重ねてゆくのである。このように「花の白雪」は叙景歌から内省的な表現、あるいは心象風景として深化したものへと変貌してゆくのである。

『詠歌一躰』の「ぬしある詞」、俊成の「花の雪ちる」は落花の散り交う「動的」世界の描写としてその比類のない美を以て制禁とせられたのであるが、「花の雪」という歌語は西行、俊恵の試みによって静的情景や遠景などをも表現するものとして発展し、以後の和

歌史にも受け継がれてゆく。そして「花の雪」「花の吹雪」に替わって「花の白雪」に使用が集中するなかで趣向や用法において全体として固定化、類型化を免れ得ぬものの、そこには桜花の美的情景から、内面描写への深化が認められるのである。

五　おわりに

俊成の「花の雪ちる」と「花の雪」「花の白雪」という表現について、本稿では表現論的観点から漢詩の表現「花雪」との関連と展開を西行、俊恵の詠歌にみたのであるが、「花の雪ちる」が制禁詞とされた後、深化してゆく美意識とともに「花の白雪」が様々な桜花の風景を描写する歌語として多用され、心情を投影し内面性の表現に傾倒してゆく意識が見て取れた。

ところで、俊成歌において「花と雪とも見分けがつかない」のはいうまでもなく（テクストという世界での）メタレベルでの認識であるが、そもそも現実的状況において「花とも雪とも見分けがつかない」という世界認識の方法は、次第に「花」をそれとして認識せず「雪」だとするように現実を拒絶する虚構への趣向となった。それは見えるものの上に常に見えざるものを見ようとする態度である。このような虚構の偏重は俊成歌において〈現実の確かさ〉を放棄して虚構を重視することによって何かわからぬもの〈混淆〉を獲得することに成功した。しかしその後も「花」をただ「花」として見ることができず、見ようとせず「雪」だという―それは和歌の伝統の継承への意志でもある―そのような固執、頑迷さは俊成歌によって達成された〈曖昧さ〉を結果として奪ってしまう。〈曖昧さ〉への願望が〈曖昧さ〉への〈固執〉―常に「花」を「白雪」に見立てること―となり、「花の白雪」の多用が〈固定化〉をもたらしたことは逆説的である。

「花の白雪」への使用の集中には歌道家によってしかれた制詞という外的な規制によって「花の雪ちる」が消滅せられたこととの関わりがある。『詠歌一躰』が「ぬしある詞」として四十数語の使用を禁じたことについては、為家以後の作歌活動を拘束したことをマイナスの作用とし、先人の創作を尊重するという道義的側面がプラスの作用と考えられてきた。夙に、風巻景次郎氏は「目新しい新語」に「使用者が無差別に殺到」したことが「類型化」を招くものだから「主ある詞を禁ずる規定は、こうした事情への防御策が法律化されたもの」であり「余儀なき時代的産物」また「時代の圧迫」であると述べておられる[23]のだが、「こうした事情」は新古今集成立以後に初めて生じたというようなものではなく普遍的に、ある表現が出現すると同時に表裏一体の形で発生するものであろう。特定の表現の使用さえ禁じれば類型化を防御、抑制できるというものでは

ない。そもそも創作とは何かを踏襲しつつ書き換えてゆく作業であり、常に挑戦的行為にほかならない。「花の白雪」が固定化の中にあって多用されながらも元来の漢詩の表現世界を独自に発展させた試みは評価されるものであろう。和歌史は内的、外的な問題に拘束されつつも、新たな世界を生成し続けてきたのである。

注

① 『詠歌一躰』の諸本は、広本系の甲本、「ぬしある詞」のみを抄出した略本系の乙本、丙本などに分類されている。久松潜一氏編校『歌論集一』三弥井書店・昭46・2の解題を参照。

② 『美濃の家つと』の本文は、大久保正氏編『本居宣長全集第三巻』筑摩書房・昭44・1に拠る。

③ 久保田淳氏『新古今和歌集全評釈第一巻』講談社・昭51・10・三四一頁

④ 丸山嘉明氏「歌論におけるセマシオロジーの立場―制詞論を中心として―」『徳島大学文学部紀要人文科学』昭35・3

⑤ 渡部泰明氏「交野の御野の桜狩―俊成自讃歌の背景―」『日本文学』平成4・9

⑥ 石田吉貞氏『新古今和歌集全註解』有精堂出版・昭35・三六八頁

⑦ 服部幸雄氏は『見立て』考」『変化論』平凡社・昭50・一九二頁で「見立て」は「象徴でも譬喩でもなく、一つの独自な表現の力」と述べられ、「見立て」については渡部泰明氏が「中世和歌と見立て」（『日本の美学』24平8・9）で研究史をふまえた上で論じておられる。

⑧ 伊藤博氏『萬葉集釋注三』集英社一九九六・五・九四頁

⑨ 片桐洋一氏「「見立て」とその時代　古今集表現史の一章として」有吉保氏ほか編『和歌文学講座第一巻和歌の本質と表現』勉誠社・平成5・12
また片桐氏は『古今集』にはこれらに類する表現として「～なりけり」があり、「みずからが気づき、納得したことを詠嘆的に表現」するものだと指摘されている。

⑩ 「花の雪」の用例を含む歌の作者は次の通りである。
新古今一一四俊成　続古今一四四通具　続拾遺五一三法眼宗円
玉葉二二四八入道前太政大臣（実兼）　風雅二二七為相女　二三三後西園寺入道前太政大臣（実兼）
新千載一五二よみ人知らず（後徳大寺左大臣実定への返し）一七二四為成

⑪ 『山家集』新潮古典集成・後藤重郎氏校注・新潮社・昭和57・4・四一〇頁頭注

⑫ 本文は橋本不美男ほか校注・訳『歌論集』日本古典文学全集・小学館昭50・4所収のものによる。

⑬ 臼田昭吾氏「西行和歌の『見立て』表現―『花』の歌を中心にして―」片野達郎氏編『日本文芸思潮論』桜楓社・平3・3

⑭ 家集、私撰集における「花の雪」の用例は次に挙げるとおりである。
続草庵集六〇　庭の面にしばしな消えそ花の雪ためしまれなる跡を残して
伏見院御集一四九　はなのゆきあすをもまたずたのめこしそのことの葉のあともなければ
経氏集六一　かすみゆく在曙の月はそれとだにまがはぬ庭のはなの雪かな
草根集一〇五六　ふりいでむ花の雪気は空晴れて梢にあらき春風ぞ

ふく

草根集一四四一　荒ち山花の雪折しかすがに音せぬ嶺の春の木がらし

新和歌集五九　さくら木のこずゑばかりやくもるらんはなの雪ふる春のやまざと

⑮ 勅撰集における「花の白雪」を含む歌の作者

千載集九三俊恵　新古今集一三六良経　続後撰集一二五教定　一二九実氏

続古今集一四三良教　続拾遺集一一二実兼　五一二源光行

新後撰集一三二忠良　一三三後宇多　玉葉二二一為家　二四二津守国助

続千載集一六五人道前太政大臣（実兼）　一六六家隆

続後拾集一二五伏見院　一〇〇二関白太政大臣（冬平）

風雅集一四八四平親清女　二〇〇八山本入道前太政大臣（洞院公守）女

新拾遺集一五九実継　一六一法皇（光明院）　一六二道性　一六三後嵯峨　一五五四為兼

新後拾集一三一関白前左大臣（師嗣）　一三三忠光　一三四御製（後円融院）　一三五前関白九条（忠基）

新続古今集一七三浄弁　一七四実遠　一七五兼空　一七六義重

なお作者名については山岸徳平氏『八代集全註』有精堂出版・昭35・7及び、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究南北朝期』明治書院　昭和40・11を参照した私

⑯ 注⑦の渡部氏の御論考に詳しい。

⑰ 神作光一氏・渡部哲夫氏『新勅撰和歌集全釈一』風間書房・平6・10・一九六頁によれば、正路の『新勅撰集抄』以外の『新勅撰集』では「花の白雲」であり、『長方集』諸本では「花の白雪」で異同がないことから、『新勅撰集』への撰入に際して定家が改編したと考えられるとの見解を示しておられる。

⑱ 臼田氏前掲論文

⑲ 稲田利徳氏「西行と慈円」『中世文学研究―論考と資料―』中四国中世文学研究会編・平6・6和泉書院

⑳ 注③の久保田氏の御見解

㉑ 「花の白雪」が第四句目におかれているのは『続古今集』一四三番、『新後撰集』一三二番、『新拾遺集』の一五九番と一六一番である。作者は注⑭を参照。

㉒ 平田英夫氏「二条家和歌における古典の継承と発展―花を白雲に紛える詠み方について―」『熊本大学国語国文研究』平5・4

㉓ 風巻景次郎氏「中世歌学の制詞」『国文学者一夕話』六文館・昭7・7『中世和歌の世界』桜楓社に所収のものを参照・三七九頁

和歌の番号と本文はすべて角川書店『新編国歌大観』に拠り、適宜傍線を施した。なお『万葉集』の歌については表記を私に改めた。また、小学館『日本国語大辞典』および大修館書店『大漢和辞典』を参照し、本文中に引用した。